

伝三条西実枝筆『源氏物語』の表紙裏反故

——翻刻と紹介・文学資料篇——

新美 哲彦

早稲田大学図書館蔵の伝三条西実枝筆『源氏物語』（二一四八六七—五二）は、三条西家旧蔵の列帖装五四帖、菊花文様高蒔絵の小筆筒（八つ抽出）に収納された調度本、いわゆる嫁入本。全帖一筆書き。金茶地に桜花文様の緞子表紙、同中央に金泥引きの斐紙題簽を付す。料紙は斐紙。縦二四・三cm、横一八・〇cm。一面一〇行書。一行一七字前後。『源氏物語』本文は、巻によって河内本に近づく三条西家所持本特有の揺れを有する。

当該本の表紙は、原状では剝離しているものが多いが、その裏に用いられる多くの反故には注目すべき内容が記載されている。本稿ではそれらの反故のうち、文学作品の写本の反故と見られるもののみを翻刻・紹介し、若干の考察を加えておきたい。調査に当たって教育学研究科の望月正秀君の協力を得たことを付記しておく。

なお、当該本には、左に示す乱丁箇所が存する。乱丁を訂した場合、反故の所在巻名が変わるケースがあるが、本稿はあくまでも原状の巻名にもとづき報告する。

〔乱丁箇所一覧〕〔①②〕は第一折・第二折を、「裏」は裏表紙を示す

空蟬・②③裏↓末摘花③④裏。末摘花・③裏↓空蟬②裏。葵・③↓若菜上④、④⑤⑥裏↓総角④⑤⑥裏。閨屋・②裏↓鈴虫②裏。薄雲・②③裏↓葵③④裏。少女・③④⑤⑥裏↓浮舟③④⑤⑥裏。初音・①抜け、②裏↓螢②裏。胡蝶・②③裏↓初音①②裏。螢・②③裏↓胡蝶②③裏。常夏・①抜け、②↓①。御幸文中の歌番号は、すべて新編国歌大観番号に拠る。②裏↓横笛②裏。若菜上・④↓竹河①。横笛②③裏↓少女③④裏。鈴虫・②③④裏↓竹河②③④裏。御法・①抜け、②③↓①。竹河・①抜け、②③裏↓薄雲②③裏。総角・④裏↓閨屋②裏。浮舟③④裏↓御幸②③裏。

〔凡例〕

一、「表」「裏」は、反故の所在が表表紙か裏表紙かを示す。また、「A」は表紙裏に直接張り付けられているものを、「B」は第一折とつながって表紙に挟み込まれているものを示す。(参考) A↓図版一(二須磨表) 右側、B↓図版二(三明石裏) 右側。

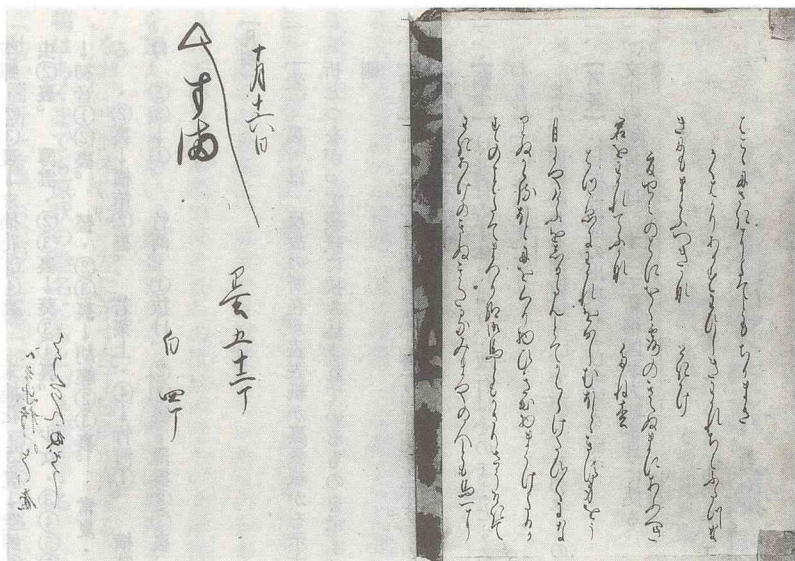
一、「書誌」に反故の寸法、料紙、書写形状等を示す。ただし反故の上に書かれる落書の類は煩雑であるので特に示さない。寸法は最大幅をcmで示す。

一、「翻字」は通行の字体により、改行はそのままとする。なお、字数の関係上、二行にまたがってしまうものには、その行の終わりに「」を付す。

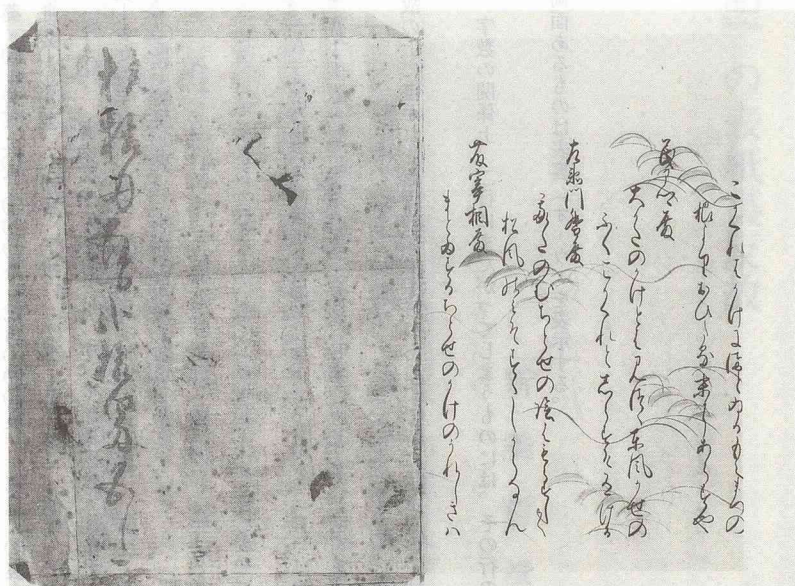
また、面の終わる箇所は「」で示し、Bの多くのように両面あるものは表裏(オ・ウ)を表示する。

一、「考証」に当該反故の典故および考察を記す。

一、文中の歌番号は、すべて新編国歌大観番号に拠る。



図版 一



図版 二

一 桐壺

裏B【書誌】縦二四・三、横一三・六。本文と同紙、同筆。

【翻字】

むらさきのうへいたうわつらひ給し御
こ、ちの後いとあつしく成給てそこ

はかとなくなやみわたりたまふこと

ひさしくなりぬいとおとろくしうは

あらねととし月かさなればたのも

しけなくいと、あえかになりまさりた

まへるを院のおもほしなげくことかき

りなししはしにてもをくれ聞えたま

はんことをはいみしかるへくおほしみつオ

御身なればあなかちにかけと、めまほし

き御いのちもおほされぬをとしころの

御ちきりかけはなれおもひなけかせた

てまつらんことのみそ人しれぬ御心の

うちにも物あはれにおほされけるのち

の世のためにとたうときこと、もを

おほくせさせ給つゝ、いかてなをほいある

さまになりてしはしもかゝつらはん命

のほとはをこなひをまきれなくとたゆウ

【考証】「源氏物語」御法「冒頭。常夏裏Bに続く。

三 空蟬

表A【書誌】縦二六・八、横一八・五。斐紙。滯標A表と同

筆。

【翻字】

時鳥聲待ほとは遠からて忍ひに鳴をきかぬな欠損

物いひつかはし侍ける人のつれなくはへり

一 ければその家の垣ねのうの花を折て

さはいひ入て侍ける

うらめしき君か垣ねの卯のはなはうしとみつ、も猶頼む

哉

かへし補入

うき物と補入

卯花のかきねある家にて

時わかすふれる雪かとみるよたに垣根もたはに咲る卯花

ともたちのとふらひまでこぬ事を恨て

つかはすとて

白妙にはほふ垣ねのうの花のうくもきてとふ人のなきかな

【考証】『後撰集』・夏・一五〇〜一五四。一五三番歌第三句、

他本では「みるまでに」。

四 夕顔

表A【書誌】縦二六・二、横一八・三。斐紙。

【翻字】

給ふ中なこんとのより中将とのへ御太刀

かたなをまいらせ給ふ六位にもしきふ

にもさまくの御ひきてものをそたま

はりけるその、ち中将はかへらせたまひ

て春宮へまいらせ給ひこかねのたちはな

のつくり物をそあけまいらせたまふ

又春宮よりはくりけの馬のいちもつに

こかねなしちのくらくおきたるむまを

たまはりけるれいけいてんへはまき、

ぬ十疋しやきんを二十両まいらせた

【考証】室町物語か。未詳。

表B【書誌】縦・二四・三、横一四・四。本文と同紙、同筆。

【翻字】

おほえ給つ、またこもりゐたまへり殿はこの

にしの臺にそきこえあつけたてまつりた

まひける大宮の御世ののこりすくなけなる

をおはさすなりなん

【考証】『源氏物語』「少女」。

五 若紫

表A【書誌】縦二六・二、横一八・八。斐紙。藤裏葉表Aと

同筆。

【翻字】

なるにとそのたまひけるさてむかし

いまのものかたりともしたまひて後大

納言のたまひけるはつらく平家のはん

しやうするありさまをみるにちやくし重盛

しげもり ○次男むねもり左右の大將なりやかと三男ともり

しげもり○ちやくそんこれもりもあるぞ
かしかれもこれも次第したにたは他家たけの

人／＼はいつ大将にあたりつくへしとも
おほえすされはつゐることなり出家せん
とそのたまひける藤藏人なみたをはら
はらとなかひて君の御出家候は、御」

【考証】『平家物語』卷二「徳大寺嚴島詣」（章段名は新編日本
古典文学全集に拠る）。

七 紅葉の賀

表A【書誌】縦二六・五、横一八・一。斐紙。本文と同紙、
同筆。

【翻字】

こと／＼しれいのおとろ／＼しきひしりこと
葉見はて、しかなとてわらひ給こゝろの
うちにはかのふる人のほめかししすちな
とのいと、うちおとろかされてものあはれ
なるにおかしとみることもゆやすしと
まゝあたりもゆやすしとまゝくあたり
も何はかりこゝろにもとまらさりけり

十月になりて五六日のほとにうちへまう

伝三条西美枝筆「源氏物語」の表紙裏反故

て給あしろをこそこのころは御らんせめ
ときこゆる人々あれと何かはそのひを」

【考証】『源氏物語』「橋姫」。

八 花宴

表A【書誌】縦二六・三、横一八・〇。斐紙。幻表Aの沙石
集と同筆か。

【翻字】

沙石集卷第四目錄

圓頓之学者鬼病をまぬかる、事

圓頓之学解之益の事

学匠之畜類に生る、事

慈心有もの鬼病をまぬかる、事

学匠の怨解事

学匠の見解僻事

学匠の世間無沙汰之事

学匠之蟻蟻の問答之事

学匠之哥よむ事

【考証】『沙石集』卷四の目錄。他本では卷五に当たる。

一〇 賢木

裏B【書誌】縦二四・三、横一五、〇。斐紙

【翻字】

ときまさつとにおきてらうをうのゆめにしめし
つることくあるさふらひに水をあひせてこの

たちのさひをのこわせいまたさやにはさゝて
ふしたるそはのはしらにそ立かけたりける

ふゆのことなれば暖氣だんきをうちにこめんとて
火はちをちかくとりよせたるにすへたる臺たいを

見ればしろかねをもつてたけ一尺はかりなる
小鬼をゐてまなこにはすいしやうを入には

こかねをそしつめたるときまさ是をみるに
此間ゆめよなく夢ゆめにきたつて我をなやましつる

ききやうのものはさもこれに似にたりつるものか
などおもかけある心ちして守り居ゐたる所に

ぬいて立たりつる太刀にはかにたふれか、
りてこの火はちの臺たいなる小鬼のかうへ

をかけすきつてそおとしたるまことにこの

おにやけて人をなやましけん時政ときまさたち

まちに心こころちなをりて其のちよりは鬼形おにがたう

のものゆめにもかつてみえさりけり扱あつかこそ

このたちををにまると名つけて高たかときの
代にいたるまで身をはなさすまもりと成なッ

【考証】「太平記」卷三三「直冬上洛事付鬼丸鬼切事」(章段名
は日本古典文学大系に拠る)。

一一 花散里

裏B【書誌】縦一八・〇、横三・五。斐紙。

【翻字】

た、夢のやうに 匂宮におみやは
かくなおほしめしそ 右近みぎちか

【考証】「細流抄」か「明星抄」の浮舟卷。

一二 須磨

表A【書誌】縦二六・五、横一八・八。斐紙。明石裏B、御

辛裏Bとは別筆。

【翻字】

はこ、にさきにたてとも ちかまさ

かくはかりあかすわひしきわかれちはふたつな

きにもまとふへきかな　ときかけ

夏せみのはにをく露のきえぬまにあふへき

君をわかれてふかな　たね松

はつこゑにわかれをおしむほと、きす身をう

月にやけふをしるらんとてかはらけたひくにな

りぬかゝるほとにをくり物ひき出物まうけたるか

すのことたてまつり給御馬ともかさりさうそきて

わきあけのきぬきたるみまやの人とも馬一に

【考証】「うつほ物語」「吹上・上」三六七―三七〇番歌。

表B【書誌】縦一〇・八、横八・〇。斐紙

【翻字】

兵衛権のすけ殿

はうぐはん殿ぞかし

【考証】未詳

裏B【書誌】縦二四・三、横一五・〇。斐紙。金泥で草花文

様の下絵。

【翻字】

つな去る文和二年六月に山名伊豆のかみか

むほんによつて主しやうていとをさらせおはし

ましてこしちの雲にまよはせ給ふこゝにつた

かもんの介山なかむほんに節をえてかた田

のうらにて君をおそひ奉りし時ひてつなか

えし合せいのちをかるんす其間に主上の

ひさせおはします事ひとへにひてつなかふ

こうによつて也其忠他にことなりとてひて

のりをえらひいたされけるこそこれは建久

のいにしえかまくらう兵衛のすけ頼朝あそん

武將にそなはり給ひし時つるか岡の八幡

くうにて荒二郎せんしをうけ取奉りし

例とそ見えし

畠山たうせい上らくの事

おもひのほか世中しつか成につけても

両雄はかならずあらそふといふならひなれは

かまくらのさまの守殿とさい相中将殿との

御中何さまふ和なる事出来ぬと人みな

あやしみ思へりこれを聞てはたけ山大夫

入たう道誓たうせいさまのかみ殿に向ひて申されウ

【考証】『太平記』卷三四「宰相中将殿賜將軍官事」「畠山道誓上洛事」。

裏A【書誌】縦二四・二、横一六・二。斐紙。

【翻字】

さきにこまくと

いまかきつけてをく

へきなりあらおもしろや

うれしやとすゝりを

ならし筆をそめ

ふたつの夢の

しなくをかき

つけ給ふそ

やさしけ

る

【考証】室町物語か。未詳。

一三 明石

裏B【書誌】縦二四・三、横一四・六。斐紙。金泥で草花文様の下絵。御幸裏Bと同筆。

【翻字】

とて侍従の君して奉れ給みこ見給て

かくかきつけて右の大殿に奉れ給

こかくれにさむくふくらん風よりも

うちなる枝のかけそす、しき

つり殿よりかくなんとて奉れ給へり右のお

と、見給て中の宮に奉れ給

風にさる枝にそ誰もす、みぬる

もとのかけをもたのむものから

みこ見給てかくかきつけ民部卿殿にたて

まつれ給オ

こかくれはかけにまとゐるもえまつの

根よりおひたる末にあらずや

民部卿殿

大かたのかけとは見つ、東風かせの

ふくこかくれとしらすそ有ける

左衛門督殿

我たのむちとせの陰はもらすして

松風のみそす、しからなん

藤宰相殿

まとゐするちとせのかけのうれしきは」ウ

【考証】「うつほ物語」「祭の使」二五八―二六一番歌。

一四 濔標

表A【書誌】縦二六・三、横一八・六。斐紙。空蟬表と同筆。

【翻字】

待人は誰ならなくに時鳥おもひの外になかばうからん
匂つ、散にし花そおもほゆる夏は緑の葉のみ茂れは

朱雀院の春宮におはしましける時

たちはきらさ月はかり御書所にまかり

てさけなとたうへてこれかれうた

よみけるに 大春日師範

五月雨に春の宮人くる時は郭公をや鶯にせん

夏夜ふかやふか琴ひくを聞て

伝三条西実枝筆「源氏物語」の表紙裏反故

藤原兼輔朝臣

みしかよの更行まゝに高砂の峰の松風吹かとそきく」

【考証】「後撰集」・夏・一六四―一六七番歌詞書。

一五 蓬生

表A【書誌】縦二六・五、横一八・〇。斐紙。本文と同紙、

同筆。

【翻字】

ことおもひあつかひうしろみたてまつるに

かゝりてなんさるふるまひし給人くもの

し給めるをさすかにその御ねかひはあな

かちなるやうにておさくうけられ給はて

けをとりておはしかよはんひんなかりぬへき

よしをなんせちにそしり申人々あまた

侍るなればた、今おほしわつらひてなん

はしめよりた、きらくしうひとのう

しろみとたのみきこえんにたへ給へる御おほえを

御おほえををしちみとたのみ聞えんに」

【考証】「源氏物語」「東屋」。九行目末の「御おほえを」は補

入。

裏B【書誌】縦二四・三、横一三・六。斐紙。本文と同紙、
同筆。

【翻字】

きをとおりたちきこえ給へとうちより御

けしきあることをかへさひそうしまたくお

ほせにしたかひてなんことさまのこといとも

かくも思さたむへきとそきこえさせ給け

るち、おと、はほのかなりしさまをいか

てさやかに又みんなまかたほなること見え

給は、かうまでことくしうもてなしお

ほさしなと中く心もとなうこひしう

おもひきこえ給いまそかの御夢もまこ

さかなき物は世のひとなりけりしねんにいひ

もらしつ、やうくきこえ出くるをこのさ

かなもの、君き、て女御のおまへに中将

少将さふらひ給にいてきて殿は御むすめま

うけたまへるなりあなめてたやいかなる人

ふたかたにもてなさるらんきけはかれも

おとりはら成とあふなけにのたまへ

は女御かたはらいたしとおほして物も

のたまはず中将しかかしたつかるへきゆへこ

【考証】『源氏物語』「御幸」。

裏A【書誌】縦二六・五、横一九・〇。斐紙。

【翻字】

○土筆 六

筆つ花 異名也春のやけ野

よめり ○かた山のしつかこもりに生にけ

りすきなましりのつくくしかな

○さほひめの筆かとそみるつくくし

○藤 七 枝葉ともによめり

いはかき藤 うらの ▼たこの ▼の

うら葉 ▼なみ 波に、たる也また藤浪を

▼かつら ▼のしけみ さかり

【考証】『藻塩草』草部。

一六 関屋

表A【書誌】縦二・五、横一九・一。斐紙。

【翻字】

新古今和歌集卷第十三

恋哥三

中関白かよひそめ侍けるころ

儀同三司母

忘れしの行末まてはかたければけふをかきりのいのち共かな

忍ひたる女をかりそめなる所にいてまかり

てかへりてあしたにつかはしける

謙徳公

限りなく結び置ける草枕いつこの旅を思ひ忘れん

たいしらす

業平朝臣

【考証】『新古今和歌集』恋三・一一四九―一一五一詞書。

裏B【書誌】縦二四・三、横一四・四。斐紙。本文とは別筆。

【翻字】

にし御心をいかてみえ奉らしの御こゝろにて

おほうは思ひなり給にし御世のそむき

なれは今もてはなれて心やすきになを

かやうになと聞え給ふそくるしうてひと

はなれたらん御すまゐにもかなとおほし

なれとをよすけてえさもしる申給はず十五夜の〇たる夕くれに仏のおま

月のまた影かくし

へに宮おはしてはしちかうなめ給つ、ねん

すし給わかき尼君たち二三人花たてまつる

とてならすあかつきのをと水のけはひ

なと聞ゆるさまかはりたるいとなみにそ、オ

我もしの欠損□てうちす(以下欠損)

いとたうとくほのくきこゆけにこゑく

聞えたるなかにす、むしのふり出たる

程はなやかにおかし秋の虫のこゑいつれ

となき中に松虫のなんすくれたるとて中宮

のはるけき野へを分ていとわさとたつ

ねとりつ、はなたせたまへるしるくなきつ

たふるこそすくなかめれ名にはたかひてく

【考証】『源氏物語』「鈴虫」。

二〇 朝顔

表A【書誌】縦二六・七、横一七・〇。斐紙。金泥の草花文様。

【翻字】

むかしおとこうみかうふりしてならの京

かすかの里にしろよし、てかりにいにけり

そのさといとなまめいたる女はらから

すみけりこのおとこかいま見てけりおもほ

えすふるさといとはしたなくてありければ」

【考証】「伊勢物語」第一段。

二一 少女

裏B【書誌】縦二四・三、横一四・二。本文と同筆、同紙。

【翻字】

御ふみはなとと返したとまわらせ」

【考証】「源氏物語」「浮舟」。

二二 玉鬘

表A【書誌】縦二六・四、横一八・二。斐紙。

【翻字】

舟とむる湊の浪のよるの夢うきねなればやさたか

一題しらす

恵助法親王

にもなき

わたの原風にまかせて行舟のこしかたしらぬ浪の

うへかな

衣笠前内大臣

わたの原八十嶋とをく行舟のゆたのたゆたに都

恋しも

都よりあつまへかへり下て後前大僧正慈鎮

のもとへよみてつかはしける哥の中に

前右大将頼朝

かへる浪君にとのみそことつてし浜名の橋の夕暮の空

嘉元百首哥奉りける時旅」

【考証】「続後拾遺集」・羈旅・五七三〜五七六詞書。

二三 初音

表A【書誌】縦二六・七、横一八・七。斐紙。源氏本文とは別

筆。関屋裏Bとも別筆。

【翻字】

なせはあためくこれをはしめのなんと

すへしことか中になのめなるましき人

のうしろ見のかたにそのもの、あはれしりす

くしはかなきつゐてのなさけありおか

しきにすゝめるかたなくともよかるへし

と見えたるにまたまめくしきすちを

たてゝみゝはさみかちにひさうなき家

とうしのひとへにうちとけたるうしろみ

はかりをしてあさゆふのいていりにつけ

てもおほやけわたくしの人のたゝすまゐ」

【考証】「源氏物語」「簪木」。

二六 常夏

表A【書誌】縦二六・二、横一六・六。斐紙。

【翻字】

かゝみし侍へかりけるとしえし侍らて

雪のふりけるを見て

もとすけ

うき世には行かくなてかき曇降はおもひの外にも有哉

司申にたまはらざりけるころ人の

訪にをこせたりける返事に

源景明

侘人は憂世中にいけらしとおもふ事さへかなはざりけり

題しらす

読人しらす」

【考証】「拾遺集」・雑上・五〇四―五〇六詞書。

裏B【書誌】縦二四・六、横一三・九。斐紙。源氏本文と同

筆、同紙。

【翻字】

みなくおほしのたまへとさらにゆるしき

こえ給はすさるはわか御こゝろにもしかおほ

しそめたるすちなれはかくねんころに

おもひたまへるついでにもよほされておな

し道にもいりなんとおほせとひとたひ

家を出たまひなはかりにもこの世をか

へりみんとはおほしをきてすのちの世に

はおなしはちすの座をなんとちきりか

はし聞え給てたのみをかけ給御中なれと」オ

らぬすみかにかけてはなれなんことをのみ

おほしまうけたるにかくいとたのもし
けなきさまになやみあつかひ給へはいと
こ、ろくるしき御ありさまを今とはとゆ
きはなれんきさまにはすてかたく中、
山水のすみかにこりぬへくおほしと、
こほるほとにた、うちあさへたる思の
ま、の道心をこす人くにはこよなう
をくれ給ぬへかめり御ゆるしなくて

【考証】『源氏物語』「御法」冒頭。桐壺卷表の続き。

二七 篝火

表A【書誌】縦二六・八、横一七・七。斐紙。

【翻字】

いかほね 上野いかほねにかみな、りそ
家いかほのねろにふる雪 いこま高ね

河内 伊豆高ね 草雲はこね さかみたつにこ草
あしからのとそへたり

わしのたかね 月雲御法
のそら かひかね ねこし山こし
ふく風雪時雨

木のはかひのしらね共 やまと
よめりことつてたつ 葛城高 雲花
やまと 吉

野たかね やまとさくらあらし春の明ほの
高根ともよめる事猶たけに同 吉志

美我たか 同あられ
いも 多胡 上つけ○よせつな
はへてよすれとも

あにくやしつ そのかはよきに よし野嶽たか つくは

▼ ひたち雪けの道ほと、きす山ひこのもかのも
か、なくわしにぬくわますゆのきぬすそわの田井

【考証】『藻塩草』山類。

二九 御幸

表A【書誌】縦二六・四、横一七・四。斐紙。上の落書で読

めず。

【考証】『伊勢物語』第一九段前後か。手習か。

裏B【書誌】縦二四・二、横一五・三。斐紙。明石裏Bと同

筆。

【翻字】

はり袴かつけ御かへりこのそまうのおろしの

おほくさふらひけるをなん物ときすきざりせは

と見給ふると聞え給中将たちの使にもし

らはり袴かけて御せうそこいひにつかはす

内にも宮殿上人あつまりてたうちあそひ
するにうへいとちかき御局なれば宮わたり給

へるにあて宮おき給へりあないさとやなどの給

程にかりおほくつれてわたる宮この雁は

いつちそやとの給中将なかつた、

つれてゆくかりかかねきけはあかてのみ

春のみやよりかへるとそきく

宮の御

あかてのみわかる、かりのたむけには

花のにしきもとちられぬかな

左大将

青柳のいとまおしとてうくひすの

かりのたむけもとちすやあるらん

中将さねより

ふるさとへつはさやすめすとふかりも

こよひはこゝにすぎすなくなり」

【考証】『うつほ物語』「あて宮」五八六―五九〇番歌。五八九

番歌が抜けている。

三〇 藤袴

裏A【書誌】縦二六・〇、横一六・八。斐紙。若紫表A、藤

裏葉表Aとは別筆。

【翻字】

ゑいりよのほとこそめてたけれそのころ内裏

より鳥羽殿へひそかに御書有けりか、らん

世にはくもいに跡をと、めても何にかはし

候へきなれば寛平のむかしをもとふらひ花

山のいにしへをもたつねて山林るらうの行しや

ともなりぬへうこそ候へとあそはされたりけ

れは法皇の御返事にさなおほしめされ候そ

さてわたらせ給へはこそ一つのたのみにても

候へ跡なくおほしめしならせ給ひなん後はなん

たのみか候へきた、ともかうも愚老かならんやうを」

【考証】『平家物語』卷三「城南之離宮」。

三一 真木柱

裏B【書誌】縦二四・三、横一四・五。斐紙。

【翻字】

是より御車をはやめられあやしけなるは

りこしに召かへさせまいらせたれとも俄の事

にてかよちやうもなかりければ大せんの大夫
しけやすかく人とよはらのかねあき隨身

はたの久武などそ御こしをはかき奉り

ける供奉のしよきやうみないくはんをぬき

ておりゑほしにひた、れをちやくし七大寺

まふてする京家の青侍などのしよしやうを

くそくしたるていにみせて御こしのせんこにそく

ふしたりけるこつの石地蔵を過させ給ひける」

【考証】『太平記』卷二「天下怪異事」。

三二 梅枝

表A【書誌】縦二六・六、横一八・一。斐紙。

【翻字】

かるところにしあれは神山のもとあらかつら
かくれかもなし

○榊四十二

真榊 天照太神天の石戸をとち給し時諸々の
神たちとこやみにまとひていか、せんと

哥舞さまくのいのり給し時まさかきのかみつ枝に
はたまをかけ中つ枝にはか、みをかけ下つ枝には

幣をかけし也仍あまのかく山に此まさかきは
あり只も神のあたりに可詠と云々 はわ

かの木榊也 ▼とる ▼葉 ▼さす間

○いにしへをおもへはくやししめのうちさかさすま
はおりまし物を顕昭云伊勢斎宮にはいたとおと

こせぬをんなはさかさすおりにをはをるゝとなん
申されはあふ事をくやしうすと云題なれはお

【考証】『藻塩草』木部。

三三 藤裏葉

表A【書誌】縦二四・四、横一七・二。斐紙。若紫表Aと同

筆。藤袴裏Aとは別筆。

【翻字】

諸社の御かうはしめには八幡賀茂春日へ

御かうならすは我山の山王へこそ御かうは

なるへきにはなくとあきの国までの御

かうはいつのならひそやそのきならば神輿しんよふり

くたしたてまつりて御幸をと、め奉れとそ

申けるこれによつてしはらく御えんゐん

ありけり入道相國さまくになための給へは

山門の大しゆしつまりぬおなしき十七日上皇

いつくしま御かうの御門出とて入道相國の」

【考証】「平家物語」卷四「嚴島御幸」。

三五 若菜下

表A【書誌】縦二四・五、横一七・二。斐紙。本文、閨屋裏

B、初音表Aとは別筆。

【翻字】

みすおろしておはしますすけにいと

たくやせくにあをみて例もほ

こりかにはなやきたるかたはおとうと

の君たちにはもてけたれていとよし

い有かほにしつめたるさまそことなるを

いと、しつめてさふらひ給ふさまなとかは

みこたちの御かたはらにさしならへたらんに

さらにとか有ましきをた、ことのさまの

たれもくと思ひやりなきにそいとつみゆ

るしかたけれなど御めとまれとさりけ」

【考証】「源氏物語」「若菜下」。

四〇 御法

表A【書誌】縦二六・六、横一九・〇。斐紙。

【翻字】

まつ覧こともをよひなくいかならんたより

にてなどおほしわつらふにはあらず

た、二葉より露はかりへたつる事

なくおひたちたまひておやたちをは

しめたてまつりよその人く御門東宮

もひとついもせとおほしめしをきたる

に我はわれとかゝるころのつきそめ

ておもひわひほのめかしてもかひなき

ものからあはれにおもひかほし給へるに

おもはすなる心のありけると覚しうと」

【考証】「狭衣物語」発端部分。

四一 幻

表A【書誌】縦二六・六、一九・三。斐紙。花の宴表Aと同

筆か。

【翻字】

おもしろけれとも法門は見え侍らぬにやまこ

とに益すくなし漢家には荆溪の金鉉

論本朝には吏部かけんしの物かたりみな

物によそへたるつくり事なれとも或は世の人の

情あらん事を思ひ或は仏法の儀理をわき

まへしめんためにそのあとを残すこれも

見聞の世間のことよせて出世解脱の道を

しらしむ古今ことなれとも其心さし同じき

もの也況やこの事皆慥に見聞侍る事を

記せり作事にあらす心あらん人此心さしを」

【考証】『沙石集』卷十末「述懐の事」。

裏B【書誌】縦二四・三、横一三・六。斐紙。花散里裏Bと

同筆。

【翻字】

そ申驚かす事も有つれと也

さやうなる 薫の詞中君の方よりこき

事にのたまふと也

からうして」

【考証】『細流抄』か『明星抄』の宿木卷。ただし「方よりこ

き」は、「方より薫に渡り給へと以前ありし事をかしこき」が

通行本文。

四二 匂宮

裏A【書誌】縦二六・六、横一七・八。斐紙。

【翻字】

そむきてとまるかくやひめゆへ

御返事

むくらはふ下にもとしはへぬる身の

なにかは玉のうてなをもみん

これを御かと御らんしていか、帰り給はんそら

もなくおほざる御心はさらにたちかへるへく

もおほされさりけれとさりとて夜をあかした

まふへきにあらねはかへらせ給ぬつねにつかう

まつる人を見給ふにかくやひめのかたはらによる

へくたにあらさりけりこと人よりはけうら」

【考証】『竹取物語』。

四四 竹河

裏B【書誌】縦二四・四、横一五・〇。斐紙。

【翻字】

さい人にむかひいかれることはをいたしてさい
人をせめてはいくちこく地獄ちごくにあらすなんち
かつみなんちをせむと罪人ざいじん此くるしみにせめ
られてなかとすれ共なんと落おちすみやう火眼くはまなこ
をこかす故ゆへにさけはんとすれ共声出こゑす鉄丸てつぐわん
のんとをふさく故ゆへに若もし一時ときの苦くるけんを語かたるとも
聞人ききは地にたふれつへし客位きやくゐの僧そう是これを見てたま
しるもつかれこつすいもくたけぬる心地こころちしておそろ

【考証】『太平記』卷二〇「結城入道墜地獄事」。

裏A【書誌】縦二六・四、横一七・五。斐紙。

【翻字】

してしかもこゝろたくみにみゆまたとし
よりかんのうのものなり哥かすかた二やう
によめりうるはしくやさしきやうもつね
におほくみゆもとくくと人は多よみおほ
せぬやうなるすかたもありこの一さま
すなはち定家の卿（マ）わうきする姿也

うかりける人をはつせの山おろしはけしかれとはい

のらぬ物を」
此すかたなり
又

鶉うすなくまの、入江の濱風はまかぜにをはななみよる秋の夕暮」

【考証】『後鳥羽院御口伝』。

四六 椎本

裏A【書誌】縦二六・〇、横一六・八。斐紙。

【翻字】

ある太福長者のいはく人はよろつを

さしをきてひたふるに徳をつくへき也

まし」

【考証】『徒然草』二二七段。

四七 総角

裏A【書誌】縦二六・二、横一八・〇。斐紙。本文の横に手
習。上に大きく文字が書かれて所々読めず。

【翻字】

とふ人とふも 新院弁内侍

とふ人もえやは待みん三輪の山雪には道の

あらしと思へ

庭雪を

藤原隆祐朝臣

とへかした跡もいとてまたれけりまた空晴ぬ

庭の白雪

といふこと(不説)

山家雪といふこと(不説)よみ侍ける

よみ侍ける

山(不説)雪のうち 法印尊海

山里は雪のうちこそ(不説)ひしけれさらぬ月日も人は

とはねと

山路雪を

侍従行家

まつ人のゆき、の岡もしら雪のあすさへふらは

跡やたえなん

まつ人のゆき、の岡も」

【考証】『続古今集』・冬・六五四―六五八番歌。

五〇 東屋

裏A【書誌】縦二六・六、横一七・四。斐紙。

【翻字】

やく是にもしらつ、しをよめるか 箕面▼つの国

いから、不 三嶋▼同右もしほ火椽目○波のたつみし

審也 三▼まのうらのうつけかいむなしき

からに我や 三▼さかみ○しはつきのみうらさき

なりなん 三▼なるねつこ草あひ見すあ

ら是我 蓑▼近江長明 三熊野▼紀州又伊勢は

恋んやは 詠と云々 三水江▼奥州●さよ

手向草駒のつまつく青つ、ら 水江▼更てみやこに

出る月かけを水 三名部▼紀州いそな○みつなへ

の江のうらに 三水傳磯▼同上岩つ、 三津

まなる釣するあまを 見てかへりこん 御座の▼土佐○うつふせと見

音松 近江しての ましのうらはかひもなし

【考証】『藻塩草』水辺。

五二 蜻蛉 裏A【書誌】縦二六・七、横一七・七。斐紙。左上に同筆で

文字が書かれる。久かたの仲におひたる里なれば光をのみそたのむ

きのとしさたかあはのすけにまかりける

時にむまのはなむけせんとてけふといひて

をくれりける時にこゝかしこまかりありき

きり(マ)て夜ふくるまで見えさりければつかはしける

つき(マ)なりひらの朝臣

の(マ)今ぞ知るしき物と人またん里をはかれすとふへ

かりけり

と(マ)こられたかのみこのもとにまかりかよひけ

しや(マ)るをかしらおろして小野といふところに

【考証】『古今和歌集』・雑下・九六八―九七〇番歌。

五三 手習

裏B【書誌】縦二四・四、横一五・一。斐紙。

【翻字】

がたみひぢににかけて御めがれもせず御覧ずれば

つま木にわらびおりぐしてむねにかゝへたる尼はあま

大宮の太政大臣伊通公の御孫鳥飼中納言伊いづみ

実卿の御むすめ五条の大納言邦綱の卿の

猶子大なごんのすけ殿と申て本三位のちうじほんみ

やうしげひらの卿の北の方先帝の御めのと

なり花かたみひぢにかけたるはすなはち女院

にてぞおはしける御留守おきにをかれたるは

弁の入道貞憲のむすめあはのないしと申も

大なごんのすけ殿と申も女院のきささのみやお

にてわたらせ給ひし御時よりつかのまも

御身をはなれまいらせざりし人共のまことの

みちに入らせたまふまでもつきまいらせた

りけるささきの世の御ちぎりのほどあはれとぞ

おほしめしける法皇は女院と御覧しまいら

せられてかたしけなくも歩の御行にて

山にむかひてあゆみおはしましけり女院は

かくともおほしめしよらせたまはざりければ

をり下らせ給ひけるが夏山なつのみとりの木の

間まより御あんじつの方を御覧ずればはらはぬう

【考証】『源平盛衰記』卷四八。表一行目「がたみひぢにかけ

て」(御めがれもせず)に脱文。他の本では「後ニアリ法皇

性アノシ思召シ」(慶長十古活字本)。

裏A【書誌】縦二六・六、横一七・三。斐紙。

【翻字】

はつせちや有しやとりの梅の花人はいとそかに匂ひける
「

古今にはつせにまうつることにやとり

ける人の家に久しくやとらてのちにいた

れりけるにかの家のあるしかくさたかに

なんやとりはあるといひいたしたりければ

そこにたたりけるむめの花をおりてよめ

るといへること葉をとりつ、かやうに

よめる

散懷集に本哥に

かそへてはのこりいくかと思ひつ、別れに春の成にける故」

【考証】二首とも鎌倉期歌人、光俊（真観）の歌。二首目は

『夫木和歌抄』七一七番歌、『歌枕名寄』二八六一番歌に出る。

第四句、他出は「人はいさとそ」。二首目は『続古今集』一七

七番歌に出る。第三句、『続古今集』では「またれつる」。一首

目の異同は、この本文では「満」の「ま」であるが、親本の段

階での「さ」と「ま」の誤写であろう。二首目は完全な異文である。光俊の歌の註釈。他に未見の新出資料。

五四 夢の浮橋

表A【書誌】縦二六・二、横一七・五。斐紙。

【翻字】

奥▼撰津○難波うらにそむきてみゆるおくの おき
しまこさまふ舟はつりをすらしも

つ▼八雲御説近江 奥小▼伊豆○はこねちをわかこえ
さて神 くれはいつのうみやおき

のこしまに波のよるみゆ隠岐に有同名濱ひさし楸日晚
薩摩にも有同名○さつまかたおきの小しまに我ありと

おやにはつけよ 興津借▼長門おく 老津▼川
八重のしほ風 まへて

○老津しましまる神やいさむらん おのころ▼あ
なみもさはかすわらはへのうら はち

をいふ也 大▼備前○つくしちのかたの大しまし
惣名也 ましくもみねは恋しきいもおきて

きぬ○大しまに水をはこひしはや舟のはやくも人に
あひみてしかな○おもふ事なをしきなみにおほし

まのなるとはなくてとしのへぬらん○みやこにと急
くかひなくおほしまのなたのかけちは塩みちにけり

【考証】『藻塩草』水辺。

【考証】『藻塩草』水辺。

〔作品一覽〕

伊勢物語・二〇朝顔表A、二九御幸表A

太平記・一〇賢木裏B、二二須磨裏B、三一真木柱裏B、四四

うつほ物語・一二須磨表A、一三明石裏B、二九御幸裏B

竹取物語・四二匂宮裏A

源氏物語・一桐壺裏B（御法）、四夕顔表B（少女）、七紅葉の

徒然草・四六椎本裏A

賀表A（橋姫）、一五蓬生表A（東屋）、裏B（御幸）、一六関

平家物語・五若紫表A、三〇藤袴裏A、三三藤裏葉表A

屋裏B（鈴虫）、二一少女裏B（浮舟）、二三初音表A（箒木）、

藻塩草・一五蓬生裏A、二七篝火表A、三二梅枝表A、五〇東

二六常夏裏B（御法）、三五若菜下表A（若菜下）

屋裏A、五四夢の浮橋表A

源平盛衰記・五三手習裏B

未詳・四夕顔表A、一二須磨表B、須磨裏A、二八野分表A、

古今集・五二蜻蛉裏A

五三手習裏A

後撰集・三空蟬表A、一四滯標表A

後鳥羽院御口伝・四四竹河裏裏A

（にいみ あきひこ 高等学院教諭）

細流抄又は明星抄・一一花散里裏B、四一幻裏B

狭衣物語・四〇御法表A

沙石集・八花の宴表A、四一幻表A

拾遺集・二六常夏表A

続古今集・四七総角裏A

続後拾遺集・一二玉鬘表A

新古今集・一六関屋表A

伝三条西実枝筆「源氏物語」の表紙裏反故